

の経験について、文献的考察を加えて報告する。

4 恒久的ペースメーカー植え込みによりクリゾチニブを継続し得た1例

鈴木 友康, 関谷 由香, 米山晋太郎
渡邊 達, 大野由香子, 西川 尚
古川 俊貴

症例は86歳, 男性。再発の非小細胞癌(ALK 遺伝子変異陽性)の診断にて外来でチロシンキナーゼ阻害剤による治療が行われていた。その一種であるクリゾチニブ開始後5日目で失神を伴う高度徐脈を合併し循環器内科へ紹介受診となった。初診時は心拍数35回/分の洞性徐脈および心拍出量減少による腎不全を呈しており緊急に一時ペースメーカー挿入を要したが, 数日後に50/分まで脈拍は改善し, 第6病日で一時ペースメー

カー離脱した。経過からはクリゾチニブの副作用による洞性徐脈が疑われたのだが, 総合診療科との検討やPSが良好であった御本人の希望から恒久的ペースメーカー植え込み下にクリゾチニブ内服継続の方針とした。

クリゾチニブはALK融合遺伝子陽性の切除不能な進行・再発の非小細胞癌として開発され, 有効性が示されている分子標的薬である。クリゾチニブを含むチロシンキナーゼ阻害薬の主な心合併症として徐脈やQT延長等が挙げられているが, 明確な機序は明らかにはなっていない。また, 心合併症に対して緊急処置を要した場合には永続的な中止が勧められている。このたび恒久的ペースメーカー植え込みによりクリゾチニブ内服を継続し得た症例を経験したので考察を加え報告する。